［特集］鹿児島・岐阜姉妹県盟約40周年

薩摩義士が結ぶ、交流の絆。

Bonds are connected to Kagoshima and Gifu.

今から250年以上前、木曽三川の治水工事に命がけで尽力した薩摩義士。この治水工事が縁となり、鹿児島県と岐阜県は、昭和46年7月27日に姉妹県盟約を結びました。今年は、鹿児島・岐阜姉妹県盟約40周年の年です。

今回の特集では、鹿児島県と岐阜県の交流についてご紹介します。

薩摩義士碑と薄墨桜　薄墨桜は、平成2年に岐阜県の旧根尾村（本巣市）から寄贈されたものです。

今年は、鹿児島・岐阜姉妹県盟約40周年

江戸時代中期（宝暦年間）、薩摩義士が薩摩から遠く離れた美濃、伊勢、尾張の国（現在の岐阜県、三重県、愛知県）を流れる木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）の治水工事を完成させたことをきっかけに始まった鹿児島と岐阜との交流。岐阜県では、この時の工事によって完成した堤防により洪水に苦しむことが少なくなったことを大変喜び、薩摩義士を「薩摩様」と呼び感謝したと言われています。しかし、鹿児島では、多数の犠牲者を出したことや膨大な予算を使わざるをえなかったことに責任を感じ、関わった薩摩藩士や子孫たちも工事について語ろうとしなかったため一般に知られることはありませんでした。薩摩義士について公に語られるようになったのは、大正5年に平田靭負が従五位を贈位された頃からだと言われています。その後、鹿児島でも薩摩義士への関心が高まり、岐阜とのつながりについて少しずつ見直されるようになってきました。

このような「宝暦治水」での結び

つきをきっかけに、昭和46年に鹿児島県と岐阜県との間に姉妹県盟約が結ばれました。盟約を結んで40年、行政レベルから民間レベルまで多岐にわたる交流が盛んに行われています。また、現在でも岐阜県では、副読本で薩摩義士の偉業を取り上げて学習する小学校があるなど、両県の絆の歴史を大切にしています。

右／**鹿児島県立図書館 薄墨桜（鹿児島市）**県立図書館の前庭にある2本の薄墨桜は、平成2年に岐阜県の旧根尾村（本巣市）から寄贈されたものです。植樹されて以降、平成15年に1度開花しただけでしたが、今年の春に8年ぶりに花を咲かせました。
左／**薩摩カイコウズ街道（岐阜県海津市）**姉妹県盟約20周年を記念し、平成3年に海津市から関ヶ原町までの約35kmにわたって、鹿児島県の県木「カイコウズ」が植えられました。

鹿児島県 薩摩義士顕彰会

薩摩義士が行った治水工事の功績を後世に継承しようと昭和36年に設立された薩摩義士顕彰会では、毎年、平田靭負の命日にあたる5月25日に、鹿児島市平之町の平田公園で薩摩義士の偉業をたたえる慰霊祭を行っています。「たくさんの犠牲を払って薩摩義士が成し遂げた偉業を、もっと多くの方々に知ってほしいですね」と話すのは幹事の石丸忍さん。

平成21年からは、鹿児島県民と岐阜県からの訪問団との交流の場を作ろうと、頌徳慰霊祭前日の24日に前夜祭を開催し交流の機会を設けています。

上／慰霊祭には、顕彰会の島津修久会長や会員、義士の遺族をはじめ、岐阜県の木曽三川流域の市町村関係者や中高生など約600人が参加します。
下右／顕彰会の四本紘さん（左）と石丸（右）さん。
下左／前夜祭では、木曽三川をイメージした手作りの灯ろう約2000個が灯されます。

【問い合わせ先】
鹿児島県薩摩義士顕彰会
☎080―4278―3216

○薩摩義士の顕彰・慰霊祭
4月　薩摩義士春季顕彰式（岐阜県海津市の治水神社）
5月　薩摩義士頌徳慰霊祭（鹿児島市の平田公園）
10月　薩摩義士秋季顕彰式（岐阜県海津市の治水神社）

姉妹県盟約40周年記念事業パネル展

薩摩義士の偉業や両県のつながりについて紹介する巡回展示を行います。（7月中旬から開催予定）

場所 県民交流センター、県庁18階展望ロビー、商業施設など

知っていますか「宝暦治水」

木曽三川とは…

美濃と尾張にまたがる広大な濃尾平野を流れる木曽川、長良川、揖斐川。木曽三川と呼ばれるこの三大河川が合流する岐阜県南部は、宝暦年間の治水工事により堤防が完成するまで、大雨のたびに至る所で堤防が破壊され、低地はことごとく浸水を繰り返すなど、長年水害に悩まされ続けていました。

幕府からの命令

1753(宝暦3)年に濃尾地方を襲った大洪水のあと、幕府は美濃から1200㎞も離れた薩摩藩に、幕府直営の大掛かりな河川改修工事のお手伝い普請(※)を命じました。この治水工事は、河川の氾濫をおさえるとともに、外様大名の筆頭である薩摩藩の勢力を弱めるという目的もありました。

当時、既に多額の借金があり財政が逼迫していた薩摩藩では、命令を断り幕府と戦うか、命令に従い借金を増やすか苦渋の選択を強いられました。しかし、「苦しんでいる人々を助けるのも仁義を尊ぶ薩摩武士の本分」という、薩摩藩家老であった平田靭負の言葉に後押しされ、治水工事を引き受けることになったのです。

※幕府が命じた工事のことで、名目はお手伝いとなっているが、実際は、工事費用のほとんどを藩側に負担させるものであった。

困難な治水工事

総奉行に任命された平田靭負ほか、途中の交代要員や追加派遣を含め、最終的に約千人の藩士が挑んだ難工事は、大きく春と秋に分けて行われました。工事の設計や工事現場の監督などは幕府が行うのに対して、工事にかかる費用の大部分は薩摩藩が負担するものでした。

1754(宝暦4)年2月に春の工事が始まりましたが、当時薩摩藩には治水工事の専門家はほとんどおらず、また、幕府や地元の人へは鹿児島弁が通じない不自由さに加え、初めて耳にする河川用語に戸惑うなど、5月下旬の春の工事終了まで困難続きでした。

秋の工事が始まるまでの間も、幕府の役人たちは江戸に帰っていましたが、薩摩の人々は国に帰ることが許されず、秋の工事に向けた大量の資材集めや運搬に奔走していました。また、この間にもしばしば洪水が起こり、そのたびに復旧作業に呼び出されたり、予定になかった支出が生じるなど、苦難が続く日々の中、病死する者や自ら命を絶つ者など犠牲者が相次ぎました。

秋の工事は9月下旬に始まりましたが、大規模な難工事に加え、途中での大きな計画変更などで春の工事以上に過酷なものになりました。

宝暦治水の工事箇所(赤丸内)

木曽川絵図［尚古集成館蔵］

止宿村方江申渡書付
幕府は、地元の村民に対して薩摩藩士へは「食事はありあわせの品で、一汁一菜とし、酒肴はいうまでもなくごちそうらしいことは一切しないこと」という命を出していました。
［鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵］